

ろばの数

(カビール)

昔むかし、ある男がろばを七頭飼かっていました。

ある日、男はろばを売ろうと思いました。そこで、市場に出かける前に、ろばをぜんぶ集めて数を数えました。ちゃんと七頭いました。

「よし。たしかに七頭だ」

男は満足まんぞくしていました。それから、一頭のろばにくらをおいてまたがり、のこりのろばをおいたてながら市場に向かいました。

市場に着くと、男は、ろばに乗ったまま考えました。

(ちゃんと七頭いるかなあ。もういちど数えてみよう)

男は、くらの上からろばの数を数えました。

「一、二、三、四、五、六、あれっ、一頭足りない」

男はおどろいてもういちど数えました。

「一、二、三、四、五、六、あれっ」

男はもういちど数えました。

「一、二、三、四、五、六、あれっ」

何回数えても六頭です。

(こまった。帰ってうちのやつに数えてもらおう)

男は、向きをかえて、六頭のろばを追いたてながらうちに向かいました。夕方、家に着くと、男はよめさんに、

「おーい。出てきてろばの数を数えておくれよ。今朝七頭いたのに六頭になった。一頭なくしちゃったんだ。ぜったい迷子まごにしてないし、売りもしてないのに」といいました。

よめさんは出てきて、ろばを見ていいました。

「それは思いちがだよ。ろばは八頭いるよ。一頭なくしたんじゃなくてふえたんだ。

おまえさんのまわりに六頭、おまえさんの下に一頭、そして、おまえさんの頭はろばの頭さ。さ、ろばから下りて、ばんごはんにしようよ」

おしまい

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『世界の民話17』竹原威滋訳／ぎょうせい

